

■津田 信 [つだ しん] 略歴

本名は、山田 勝雄（やまだ かつお）。東京都生まれ、府立第三商業学校を卒業後、早稲田大学進学。1944年従軍し、満州に出征。戦後、復員後は新聞記者となり、下山、三鷹事件などを担当する。

記者生活のかたわら創作を始め、1930年同人誌『貌』に参加し、翌年発表した『臆患の果て』が第35回芥川賞候補になる、以後、『風の中の』が芥川賞候補、『日本工作人』が直木賞候補など、合計8回候補になった。この間、小島政二郎に師事し、立原正秋、高井有一らと同人誌『犀』に参加、徳田秋声に私淑して、作品を発表し続けた。

1966年、日本経済新聞社を退社し、文筆生活に入る。しかし、以後10年間、『週刊現代』『女性自身』など週刊誌のアンカーやゴーストライターを務め、作品は発表しなかった。

1977年、ノンフィクション作品『幻想の英雄・小野田少尉との三カ月』を発表し、ルバン島帰還兵・小野田寛郎のベストセラー『わがルバン島の30年戦争』（講談社、1974年）およびその元になった週刊誌連載の「手記」のゴーストライターであることを表明。「手記」の内容が偏向したものであることを明らかにして話題を呼んだ。

以後、『夜々に掟を』『日々に証を』『結婚の構図』などを発表した。1981年心筋梗塞で倒れ、1983年に58歳で死去。

■津田信 [つだ しん] 年譜 （1925年9月1日～1983年11月22日）

・1925年

9月1日、東京・芝区愛宕下町4丁目（港区新橋4丁目）に生まれる。本名・山田勝雄。父恒雄、母ふくの次男で8人兄弟（男2、女6）の末っ子。芝区立桜川尋常小学校から愛宕高等小学校へ。

・1939年（14歳）

府立第三商業学校に入学。6月、乾性肋膜炎になり鎌倉山にあった叔父宅でひと夏転地療養（翌年も再発し、同じく鎌倉へ）。

・1940～1942年（15～17歳）

小説を耽読し、級友とガリ版同人誌を発行。投稿雑誌『若草』『文庫』などに小品を投稿、幾

度か佳作に。

・1943年（18歳）

6月、友人と2人で三鷹町の太宰治宅を訪問。小説家とはじめて接す。8月、野口富士男氏を訪問、徳田秋声文学の手ほどきを受ける。12月、府立三商を繰上げ卒業。

・1944年（19歳）

3月、徴兵検査で第2乙種合格。12月、応召、東部六部隊（東京麻布一聯隊）に入営、渡支。

・1945年（20歳）

満州にて終戦。中共軍衛生部の使役に従事。日本工作人と呼ばれる。

・1946年（21歳）

12月、引揚げ船で帰国。都下調布町の戦災者寮に住む母の許へ。

・1947年（22歳）

4月、サンニュース・フォト社へ入社。社会部記者となり警視庁詰め。

・1948年（23歳）

3月、第一新聞社へ移り、引き続き警視庁詰め。太宰治情死事件などを取材。

・1949年（24歳）

4月、日本経済新聞社の第一新聞社合併にともない日経社へ。引き続き社会部警視庁詰め。下山、三鷹事件などを担当。都下神代村（現・調布市）の都営住宅に移る。

・1950年（25歳）

11月、鈴野満佐子と結婚。

・1952年（27歳）

6月、整理部へ転属。12月、長男順生まれる。

・1953年（28歳）

同僚との同人誌、組合機関誌などに小説を発表。横浜市南区若宮町の妻の実家へ移る。

・1955年（30歳）

8月、次男幸伯生まれる。11月、鎌倉市津517（腰越4-3-10）へ転居。同人誌「貌」に参加。

・1956年（31歳）

2月、「貌」と合併した第三次「文学生活」創刊号に『復讐』（70枚）を発表。山本周五郎より激賞の手紙をもらう。以後、しばしば横浜本牧の山本氏の仕事場（マカドエン）を訪れて教えを受ける。6月、「貌」4号に『瞋恚の果て』（125枚）を発表。同作品が第35回芥川賞候補に挙げられる（受賞は近藤啓太郎『海人舟』）。12月、「新潮」同人誌推薦作特集に『流茫』（37枚）が掲載され、小説ではじめて原稿料（1枚500円）をもらう。

・1957年（32歳）

6月、「貌」5号に『風の中の』（120枚）、9月「別冊週刊サンケイ」に『小箱』（37枚）を発表。11月、「秋田文学」同人になる。『風の中の』が第37回芥川賞候補に（受賞は菊村到『硫黄島』）。

・1958年（33歳）

1月、「秋田文学」3号に初の長編『日本工作人』第一部（130枚）、5月、同4号に第二部（98枚）を発表。7月、同作品が第39回直木賞候補に（受賞は山崎豊子『花のれん』、榛葉英治『赤い雪』）。9月、同5号に第三部（110枚）を発表。10月、初の単行本『日本工作人』（現代社）刊行。11月、銀座で同本の出版記念会。小島政二郎、十返肇、野口富士男、和田芳恵、瀬戸内晴美、安田武、藤井重夫氏らが出席。このころより小島政二郎氏に師事。

・1959年（34歳）

1月、『日本工作人』が第40回直木賞候補に（受賞は城山三郎『総会屋錦城』、多岐川恭『落ちる』）。3月、「秋田文学」7号に『春の掟』（100枚）、6月、同8号に『暮色』（100枚・短編4編）、12月、同10号に『女夫ヶ池』（237枚）を発表。「秋田百点」に『遠い人』を連載（未完）。

・1960年（35歳）

1月、『女夫ヶ池』が第42回直木賞候補に（受賞は司馬遼太郎『梟の城』、戸板康二『團十郎切腹事件』）。11月、「秋田文学」12号に『忍ヶ丘』（138枚）を発表。

・1961年（36歳）

1月、『忍ヶ丘』が第44回直木賞候補に（受賞は寺内大吉『はぐれ念仏』、黒岩重吾『背徳のメス』）。5月、『女夫ヶ池』（大和出版社）を刊行。

・1962年（37歳）

5月、「秋田文学」15号に『夜の暦』（80枚）を発表。7月、同作品が第47回直木賞候補に（受賞は杉森久英『天才と狂人の間』）。

・1963年（38歳）

「三田文学」5月号に『冠婚葬祭』（70枚）、11月、「秋田文学」20号に『菩薩』（90〇枚）を発表。小冊子に掌編、短編を3、4編発表。

・1964年（39歳）

5月、「秋田文学」22号に『がんもどき』（70枚）、10月、「詩と小説と評論」に『破れ暦』（80枚）、11月、「犀」創刊号に『吹き降り』（80枚）を発表。

・1965年（40歳）

1月、『破れ暦』が第52回直木賞候補に（受賞は永井路子『災環』、安西篤子『張少子の話』）。「小説現代」5月号に『二重丸の女』（58枚）、同7月号に『海のわかれ』（40枚）、11月、「冬樹」3号に『夜の償い』（80枚）を発表。10月、初の書下ろし長編『たそがれの橋』（冬樹社）を刊行。

・1966年（41歳）

2月、日本経済新聞社を退社。文筆生活に入るも、以後約10年間、週刊誌、月刊誌、婦人誌記事のリライト、著名人の手記代筆、紀行記、映画評などをやり、小説は一作も発表せず。4月、「秋田文学」28号に『ああ直木賞』掲載。

・1967年（42歳）

母ふく死去。東京・牛込抜弁天の仕事場で月の大半を過ごす生活が続く。

・1974年（49歳）

「小説宝石」5月号に『夜の形見』（54枚）、7月号に『けもの谷』（50枚）を発表。5～7月、28年ぶりに帰還した元日本兵小野田寛郎と共同生活をし、同人の手記「戦った、生きた」（「週刊現代」連載。単行本では『わがルパン島三十年戦争』と改題）を代筆。その間、フィリピン・ルパン島を取材。

・1975年（50歳）

6月、中郡二宮町山西40番地に転居。「小説宝石」6月号に『背信の白い肌』（80枚）（『吹き降り』改作）を発表。

・1976年（51歳）

7月、書下ろし長編『夜々に掟を』（520枚）（光文社）を刊行。

・1977年（52歳）

6月、書下ろしノンフィクション『幻想の英雄—小野田少尉との三ヵ月』（580枚）（図書出版社）を刊行、反響を呼ぶ。8月、「週刊ポスト」に『英雄批判』（ルポ）を5回連載。4～12月、藤沢鵜沼公民館で文学講座を担当。「舟橋聖一の人と文学」「自然主義作家の系譜」「女流作家研究」などを講ず（56年9～10月にも）。

・1978年（53歳）

4月、旺文社文庫の太宰治『津軽』に解説を執筆。6月、心筋梗塞で倒れ、小田原・山近病院に40日間入院。10月、書下ろし長編『日々に証しを』（430枚）を刊行。

・1979年（54歳）

6～12月、スピック社で西武流通グループの社内報編集を手伝う。

・1980年（55歳）

「主婦と生活」2～12月号に長編小説『哀しからずや』を連載。

・1981年（56歳）

2月、『結婚の構図』（『哀しからずや』改題）を主婦と生活社より刊行。2～12月号「主婦と生活」に『女の裏窓』（事件にもとづくフィクション）を連載。4～7月、横浜放送映画専門学校で「文学」講座担当。10月より「週刊宝石」のリライトをはじめる。「小説宝石」12月号に『夜の虜』を発表。

・1982年（57歳）

4～7月、横浜放送映画専門学校で講座。

・1983年（58歳）

2月、再び心筋梗塞で倒れ、横浜・有馬病院に1ヵ月入院。11月、3たび心筋梗塞の発作、同22日午前、有馬病院にて死去。享年58歳。

（文責 山田幸伯）